

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13192

研究課題名（和文）現代中国語における場面文のメカニズムに関する研究

研究課題名（英文）Research on the Mechanism of Locative Sentences in Modern Chinese

研究代表者

謝平（XIE, Ping）

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：70768241

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：中国語の「場面文」には四つの語順があり、八つのパターンが存在する。従来の研究では、動詞に前置するNPは定名詞であり（所在文）、動詞に後置するNPは不定名詞である（存現文）とされてきた。しかし、所在文でありながら、NPモノが不定名詞であるケースも存在し、反対に存現文でありながら、NPモノが定名詞である用例も多くみられる。本研究の目的は、場面文の語順と場面文の構成要素である「主体部」（NPモノ）、「動詞部」（VP）、「場所部」（NPトコロ）に着目し、各パターンの意味機能を考察し、各パターンがどのように使い分けられているのか、また具体的な文脈でどのパターンが選択されるかを明らかにすることである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、場面文のすべてのパターンを取り上げ、場面文を構成する「場所部」、「動詞部」、「主体部」という三要素を中心に考察し、「場面文」の生成メカニズムを解明し、ある程度中国語の語順と意味の関係を明らかにした。

また、「存在文」の生成について動詞の非対格性の視点から多く議論されているが、説明できないケースも少なくない。特に、「定性・不定性効果」というルールから外れた定名詞存現文と不定名詞主述文の述語は、複雑な動詞フレーズからなるとされているが、説明できない用例も多くみられる。これらの問題を解決することにより、中国語学習者に大いに役立つと考える。

研究成果の概要（英文）：In previous studies, the word order of “場面文” (Locative Sentences) has been classified into two types: the NP preceding the verb is considered as a definite noun phrase (locative sentences), and the NP following the verb is considered as an indefinite noun phrase (existential sentences). However, there are some cases which the NP in locative sentences is indefinite, and conversely, in existential sentences, many examples show the NP as definite. Therefore, there are four kinds of word order and eight patterns of “場面文” in Chinese. The purpose of this study is, through focusing on the word order of “場面文” and its constituent elements: the “subject part” (NP), the “verb part” (VP), and the “location part” (NP), by examining the semantic functions of each pattern in order to elucidate how each pattern is utilized and differentiated, as well as revealing which pattern is selected in specific contexts.

研究分野：中国語学

キーワード：場面文 存現文 所在文 語順 定性名詞 不定性名詞 自動詞 他動詞

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の対象とする現代中国語の場面文は、次のような4つの語順と8つのパターンである。

#### 語順A

A1. 門外站着 | 王曉明。 (NP<sub>トコロ</sub> + VP + NP<sub>モノ(定)</sub>)

A2. 門外站着 | 一個学生。 (NP<sub>トコロ</sub> + VP + NP<sub>モノ(不定)</sub>)

#### 語順B

B1. 王曉明 | 站在門外。 (NP<sub>モノ(定)</sub> + VP + NP<sub>トコロ</sub>)

B2. (有)一個学生 | 站在門外。 (NP<sub>モノ(不定)</sub> + VP + NP<sub>トコロ</sub>)

#### 語順C

C1. 門外, 王曉明 | 站着。 (NP<sub>トコロ</sub> + NP<sub>モノ(定)</sub> + VP)

C2. 門外(有)一個学生 | 站着。 (NP<sub>トコロ</sub> + NP<sub>モノ(不定)</sub> + VP)

#### 語順D

D1. 王曉明 | 在門外站着。 (NP<sub>モノ(定)</sub> + NP<sub>トコロ</sub> + VP)

D2. (有)一個学生 | 在門外站着。 (NP<sub>モノ(不定)</sub> + NP<sub>トコロ</sub> + VP)

先行研究では、B1、D1のように主体名詞が「定」である場合は、一般的に文頭に置かれると説明されている。また、A1、A2のようなパターンは、描写表現や存在表現であるとされており(範方蓮1963, 雷濤1993, 澤田浩子2006など)、B2、D2のような主体名詞が「不定」であるパターンについては、述語の部分に十分な描写的表現があれば成立すると指摘されているが(範継淹1985, 黃師哲2004, 雷桂林2008など)、描写以外の視点から考える必要がある。

また、「存在文」(語順A)であるか否かを判断する際に、ほかの語順との互換性を取り上げる先行研究も少なくない。範方蓮(1963)、宋玉柱(1988)などは、「存在文」は、「NP<sub>モノ</sub> + (V) 在 + NP<sub>トコロ</sub>」(語順B)や「NP<sub>モノ</sub> + 在NP<sub>トコロ</sub> + V着」(語順D)あるいは「NP<sub>トコロ</sub> + 有 + NP<sub>モノ</sub> + (V着)」(語順C)に置き換えられると指摘しているが、変換できないケースもみられる。

さらに、先行研究のほとんどは、統語論の観点から「存現文」について議論しており、文脈背景などを取り入れて語用論的観点から分析する研究はまだ少ない。場面文の各パターンの使用に文脈・背景なども影響すると考えられるため、事例に基づいて語用論的観点から分析することも必要であると考えられる。

### 2. 研究の目的

(1) 従来の研究では、主にB1 (NP<sub>モノ(定)</sub> + VP + NP<sub>トコロ</sub>)とA2 (NP<sub>トコロ</sub> + VP + NP<sub>モノ(不定)</sub>)の相違点、及び使用頻度の低いA1 (NP<sub>トコロ</sub> + VP + NP<sub>モノ(定)</sub>)とB2 (NP<sub>モノ(不定)</sub> + VP + NP<sub>トコロ</sub>)の使用理由について議論されてきた。本研究は、場面文を独自に定義した上で、典型的なパターンのみならず、非典型的なパターンも含めた各パターンを取り上げ、場面文を構成する「場所部」、「動詞部」、「主体部」という三要素を中心に考察し、「場面文」の生成メカニズムを明らかにする。

(2) 「定性・不定性効果」というルールから外れた定名詞存現文と不定名詞主述文の述語は、複雑な動詞フレーズからなるとされているが、説明できない用例も多くみられる。本研究は、語用論的観点から分析し、各パターンの実際の使用状況を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究は、「主体部」、「動詞部」、「場所部」の三部分から各パターンの成立条件を考察し、各パターンの意味機能、文法機能について分析する。考察方法として視点や参照点、背景化など認知言語学の観点からもアプローチし、場面文に用いられる動詞を分類し、場面文の語順に影響する要素を探り、場面文の語順を左右する要因を考察した。

(2) また、従来の文法研究は、コンテキストを重視せず用例を抜粋してその適格性を議論することが多かった。しかし、場面や状況によってニュアンスが変わることも考えられるため、本研究は語用論の研究手法も取り入れて考察した。コーパス以外、場面文が多く使われている『呼蘭河伝』という小説から用例を抜粋し、データベースを構築しながら研究を進めた。

### 4. 研究成果

#### (1) 場所部 (NP1) について

存現文の文頭の位置にあるのは、場所や時間などを表す語句であるが、多くの研究では、場所詞だけでなく、時間詞も存現文の主語の役割を担うことができると指摘されている。しかしその一方で、「時間」を表す語句は「状語」(連用修飾語)に過ぎないと指摘する研究もある。本研究では、まずNP1の意味特徴を分析した上で、NP1の機能を果たす「時間詞」と「場所詞」の相違点を考察した。

分析の結果、「出現、存在、消失」の事態が成立するには、焦点になっているターゲットとそれの存在を特定できる参照点が不可欠であることがわかった。また、人間は出現、存在、消失の状態を五感で知覚できるため、参照点を空間あるいは場所にする傾向があると考えられる。つまり、NP1は参照点になっている空間または場所を表し、VPは「出現・存在・消失」の状態を表し、NP2はターゲットの主体を表すということである。NP1は抽象的に感じる「時間」よりも視覚でとらえる「場所」のほうが優先的に求められる。

また、自然現象文が「NP<sub>主体</sub>+V+在+NP<sub>1</sub>」の語順に変換できるか否かについて、NP<sub>1</sub>とはどのような関係性があるのかについて考察した。範方蓮（1963） 聶文龍（1989）などでは、自然現象文も「存現文」の例として挙げられているが、朱德熙（1982）などのように、“外頭下着雨”のような自然現象文は、「NP<sub>主体</sub>+V+在+NP<sub>場所</sub>」の語順に変換することができないため、「存現文」ではないとする指摘もある。しかし、考察の結果、以下のような自然現象文は、「NP<sub>主体</sub>+V+在+NP<sub>場所</sub>」に変換できることが分かった。

- (1) 空中浮着些灰沙，風似乎是在上面疾走，星星看不甚真，隻有那幾個大的，在空中微顫。（老舍《駱駝祥子》/CCL）  
灰沙浮在空中，……
- (2) 田地上籠罩着灰藍色的、新鮮而美妙的陰涼的空氣，……（路翎《燃燒的荒地》/BCC）  
灰藍色的、新鮮而美妙的陰涼的空氣籠罩在田地上，……

上記の二つの自然現象文における NP1 の共通点は、漠然とした場所を表すのではなく、NP2 の最終的にたどり着く主体と接触する接触面を具体的に示しているということである。また、自然現象文は、形式的にも意味的にも存現文の条件に合っているため、存現文の一種であると結論づけた。

## (2)動詞部 (VP) について

### 2.1 動詞部と存現文の判断基準

本研究では、まず動詞部 (VP) の特徴を考察し、「存現文」の判断基準について議論した。「存現文」の語順 (NP トコロ + VP + NP モノ) に似ていながら、「存現文」ではない用例も多く見られるため、「存現文」の真偽についてもよく議論されているが、宋玉柱 (1988)、盧英順 (2017) など多くの先行研究では、構文の互換性に基づいて判断されており、つまり、「場所部 (NP トコロ) + 有 + 主体部 (NP モノ)」あるいは「主体部 (NP モノ) + 動詞部 (VP) + 場所部 (NP トコロ)」という語順に変えることができるかどうかによって判断するという結論が出されている。しかし、明らかに存現文でありながら上記の語順に変えられない例も存在する。

本研究では、「存現文」の認識図式には必要な要素は、動作主が存在するかどうかではなく、「存在・出現・消失」の主体が存在するかどうかであると考えている。また、存現文の「動詞部 (VP)」の主幹動詞を分析した結果、存現文の VP の主幹動詞は以下のものからなっていることがわかった。

#### A. 目的語を取らない動詞

“出現”、“消失”などのような非行為動詞からなっている。  
“坐”、“站”などのような行為動詞からなっている。

#### B. 目的語を取る動詞

“画”、“删除”などのような行為動詞からなっている。

さらに、考察の結果、動詞部の主幹動詞が上記の A である場合は、「動作主」のイメージを消すためには、語順は通常の「S+V」と違って、「V+S」になるということがわかった。A の場合は、語順が異なるため、判断しやすいと言えよう。しかし、存現文の動詞部の主幹動詞が上記の B である場合は、主体が動作の対象であり、「存現文」の語順は通常の「V+O」という語順と変わらないことが分かった。つまり、B の場合は、文全体に対するイメージには「動作主」が存在しないことが「存現文」であると判断できる鍵となる。

### 2.2 動詞部と語順について

現代中国語における存在の場面において、少なくとも四つの語順が使用されている。存在文である A 語順 (「P<sub>場所位置</sub> + A<sub>動作行為</sub> + 着 + T<sub>描写対象</sub>」, 例: 門外站着一个人) について多く研究されているが、A 語順と B 語順 (「T<sub>描写対象</sub> + A<sub>動作行為</sub> + 在 + P<sub>場所位置</sub>」, 例: (有) 一个人站在门外) C 語順 (「P<sub>場所位置</sub> + T<sub>描写対象</sub> + 在 + A<sub>動作行為</sub> + 着」, 例: 门外有一人 (在) 站着) D 語順 (「T<sub>描写対象</sub> + 在 + P<sub>場所位置</sub> + A<sub>動作行為</sub> + 着」, 例: (有) 一个人在门外站着) との違いについてはまだ議論の余地がある。本研究では、述語 (動詞部) の意味特徴に着目し、A 語順と比較しながら、B、C、D 語順の生成条件について分析した。

その結果、「存在義」があれば成立する A 語順と異なり、ほかの語順の成立条件は述語 (動詞部) の「存在義」だけではないことがわかった。「(有) 一个人站在门外」のような B 語順は、先行研究でも指摘されているように、述語の「附着義」も求められる。しかし、それに加えて、本研究の考察で、「附着義」を持つ動詞は三種類があり、それぞれの意味特徴によって、P 場所位

置との整合性も必要であることが分かった。

また、「門外有一个人(在)站着」のようなC語順の述語は、「他動性」のない「状態義」が求められているが、“茶館里有汽燈掛着”、“朝南的窗下有一張八仙桌擺着”のように、「在」が用いられていない場合は「他動性」の強い動詞が用いられても許容度が高くなることがわかった。“(有)一個人在門外站着”のようなD語順は、述語は「他動性」のない「状態義」あるいは「瞬間性」を持ちながら「結果残存義」を持つことが要請されることが分かった。

### (3) 存現文の使用状況について

本研究では、範方蓮(1963)、宋玉柱(1991)、雷濤(1993)、潘文(2006)、帥志嵩(2017)などの先行研究を踏まえ、動詞部の形式的な特徴に従って存現文を以下の八類に分けた。

有	ex. 門前有一棵老槐樹。(宋玉柱 1982: 9)
裸動詞	ex. 正中右窗上懸一幀巨闊、油漬的焦閻王半身像。(潘文 2006: 97)
V+C	ex. 屋子里飛進來一隻蜜蜂。(聶文龍 1989: 95)
V+着	ex. 天上飛着一隻鳥。(雷濤 1993a: 245)
V+(C)+了	ex. 那凝練的天上,有了紅光。(崔建新 1987: 46)
V+過	ex. 他脖子上長過火癩子。(宋玉柱 1991: 1)
是	ex. 山下是一片綠油油的稻田。(潘文 2006: 90)
動詞なし	ex. 樹下一位老人。(潘文・延俊榮 2007: 212)

また、本研究は『呼蘭河傳』という小説にある存現文の用例を種類別に整理してデータベースを構築し、語用論の視点から各種類の存現文における『呼蘭河傳』での使用状況を考察した。調べた結果、『呼蘭河傳』では、上記の八種類はすべて使われているものの、最も多く使用されるのは、「有」<sub>レ</sub>、「V+着」<sub>レ</sub>、「V+(C)+了」の三種類であることがわかった。各種類の表す意味については、「有」<sub>レ</sub>、「V+着」<sub>レ</sub>、「是」と「動詞なし」の四種類は、「出現」<sub>レ</sub>、「消失」を表さず、主に「存在」を表す傾向がみられる。さらに、「有」以外の裸動詞<sub>レ</sub>、「V+C」<sub>レ</sub>、「V+(C)+了」<sub>レ</sub>、「V+過」は、「存在」を表すことができるだけでなく、「出現」と「消失」を表すこともできることが明らかになった。

この結果から、中国語教育において示唆できる点として、「存現文」を学習させる際は、「有」<sub>レ</sub>、「V+着」<sub>レ</sub>、「V+(C)+了」の三種類を学ばせる必要があると考えられる。また、学習の順序としては、まず存在を表す「有」構文を学び、次に動詞が多様な「動詞+着」の形式を学び、最後に隠現を表すこともできる「動+(補語)+了」の形式を学ぶことが合理的であるといえよう。

### (4) 主体名詞(NP2)の「定性」と「不定性」について

冒頭でも述べたように、現代中国語においては、存在を表す「場面文」には大きく分けて「場所詞+動詞+名詞(主体)」という語順になる「存現文」と、「名詞(主体)+動詞+場所詞」という語順になる「所在文」がある。両者の語順については、存在物を表す主体名詞が「定性」を持つ場合は、文頭に置かれて「所在文」の主語となり、「不定性」を持つ場合は、文末に置かれて「存現文」の目的語になる傾向があるが、これはいわゆる「定性・不定性効果」あるいは「定性・不定性制限」という定説になっている。

中国語は独自の文法性を持っており、英語の「定性・不定性」をそのまま当てはめることができないため、これまで盛んに研究され、すでに大きな成果を上げているが、「定性」と「不定性」の具体的な定義と範囲はまだ一致しておらず、様々な意見がある。また、これまでの定説である「定性・不定性制限」に反して、「不定性」を持つ名詞が主語になる用例や、「定性」を持つ名詞が「存現文」の目的語になる用例も多くみられる。

本研究では、「定性」と「不定性」の判断基準と範囲についての従来の研究を整理し、これまでの研究成果を確認した。従来の研究を整理した結果、「定性」と「不定性」の判断基準については、「識別性」あるいは「同定性」以外の要素についても論じられており、特に「唯一性」や「既知性」<sub>レ</sub>、聞き手と話し手の「共通認識」などについては一致した意見がないため、これからも検討されると思われる。

また、本研究は名詞の定性と不定性は、存在表現の語順とはどのような関係があるのかを明らかにすることを試みた。考察した結果、動詞部が他動詞の場合は、不定名詞存在文の許容度が低いということが分かった。また、存現文の目的語は、不定名詞だけではなく、定名詞も動詞の後に置かれることができ、一部の先行研究でも指摘されたように、「不定性制限」は中国語の存現文には適用しないことを確認できた。

#### <引用文献>

- 崔建新 1987. 隠現句的謂語動詞,《語言教學與研究》第2期  
範方蓮 1963. 存在句,《中國語文》第5期  
範繼淹 1985, 無定NP主語句,《中國語文》第2期  
黃師哲 2004, 無定名詞主語同事件論元的關係,《中國語言學論叢》第3輯(黃正德主編),北京語言大學出版社  
雷濤 1993. 存在句的範圍構成和分類,《中國語文》第4期

- 盧英順 2017.《關於漢語“存在句”幾個問題的新思考》，《語言教學與研究》第3期
- 聶文龍 1989. 存在和存在句的分類，《中國語文》第2期
- 潘文 2006.《現代漢語存現句的多維研究》，南京師範大學齋出版社
- 潘文·延俊榮 2007. 論現代漢語存現句的語用分類，《江蘇社會科學》第1期
- 宋玉柱 1982. 動態存在句，《漢語學習》第6期
- 宋玉柱 1988.《略談“假存在句”》，《天津師大學報》第6期
- 宋玉柱 1991. 經歷體存在句，《漢語學習》第5期
- 帥志嵩 2017. 從詞匯—構式範式看漢語存現句的分類和範圍，《語言教學與研究》第3期
- 朱德熙 1982.《語法講義》，商務印書館
- 澤田浩子 2006.「描写に関する個とステレオタイプ 談話から見る中国語の『存現文』」，『言語に現れる「世間」と「世界」』，くろしお出版
- 謝平 2019. 小議現代漢語存現句的辨別原則，『ことばの科学』第33号，名古屋大学言語文化研究会
- 謝平 2021. 存現文のNP1についての一考察，『九州中國學會報』第59号，九州中國學會
- 謝平 2022. 現代中国語場面文の語順について 述語の意味特徴を中心に，『日中語彙研究』第11号，愛知大学中日大辞典編纂所
- 謝平 2023.《呼蘭河傳》中的存現句，『福岡大学人文論叢』第55卷第1号
- 雷桂林 2008. 不定名詞主語文の場面描写機能，『中国語学』第255号

< コーパス >

BCC : <http://bcc.blcu.edu.cn/>

CCL : [http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 謝 平	4. 巻 11号
2. 論文標題 現代中国語場面文の語順について 述語の意味特徴を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日中語彙研究	6. 最初と最後の頁 121-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 謝平	4. 巻 59
2. 論文標題 存現文のNP1についての一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州中国学会報	6. 最初と最後の頁 90-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 謝 平	4. 巻 33号
2. 論文標題 小議現代漢語存現句の辨別原則	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ことばの科学	6. 最初と最後の頁 117 131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/stul.33.117	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 謝 平	4. 巻 55巻第1号
2. 論文標題 《呼蘭河伝》中の存現文	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『福岡大学人文論叢』	6. 最初と最後の頁 113-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 謝 平	4. 巻 56巻第1号
2. 論文標題 中国語の名詞句における定性と不定性に関する研究の概観	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『福岡大学人文論叢』	6. 最初と最後の頁 339-363
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 謝 平
2. 発表標題 「NP1+V+着/了+NP2」 と 「NP2+V+在+ NP1」 《呼蘭河伝》での用例を中心に
3. 学会等名 日本中国語学会九州支部2021年度第1回例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 謝 平
2. 発表標題 動詞の特徴から考える中国語の場面文における語順
3. 学会等名 日中言語対照学会第44回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 謝 平
2. 発表標題 存現文のNP1についての一考察
3. 学会等名 九州中国学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 謝 平
2. 発表標題 存在表現の主体名詞について－「定」と「不定」を中心に－
3. 学会等名 日本中国語教育学会2023年度第3回研究会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------